

未刊室町後期歌会資料―釈文と略解題―(三)

武井和人
酒井茂幸

【緒言】

小論は、未刊のまま多く伝存する室町後期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としたものである。

今回の小論では、歴史民俗博物館蔵高松宮本の中から、以下の未刊歌会資料一点を選び、釈文を示し、併せて略解題も付した。詳しい考察は、今後の課題としたい。

〔1〕禁裏御点取和歌（H―一四六一・二）二軸

草稿は以下の分担で執筆した。

H―一四六一・釈文 …………… 武井

H―一四六一・二・釈文、略解題 …………… 酒井

ただし、武井・酒井両名で相互に検討した。

釈文作成にあたり、以下の方針に従った。

(1) 漢字は原本に近い字形を可能な限り採った。

(2) 底本には、歌末に細字で評語がままする。それら評語は、当該歌の次行に、一字下げの左注形式として掲出した。また、評

語には適宜読点のみを施した。

(3) 本文は、両書が上下で対照出来るやうなレイアウトで示した。従って底本に存しない空白行が時に生ずる。留意されたい。

(4) ミセケチは二重消し線で示した。

(5) 破損部は字数分を□で示し、推定される本文を傍らに記した。

(6) 底本に存する合点は、歌頭に「●」で示した。

(7) 底本の書誌は、略解題を参照されたい。

小論は、

① 「校勘の方法に関する基礎的研究」（平成二三〜二五年度・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究、研究代表者〓武井）

② 「中世後期歌会資料の総合的研究」（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）〓一般研究②外部資金獲得促進研究〓、研究代表者〓武井）

による研究成果の一部を含む。

（武井和人）

〇H一四六一

姉小路宰相點明應三年十月日

立春

●うす氷けふとけそめていけ水に　むかへは春の色そうかへる　御製
いつみるもかすむ色なるとを山ハ　めつらしけなき春や立らん
雪うすき野山の木のめ今朝ハまた　かすみにこもる春や来ぬらむ

海邊霞

もしほやくけふりはあれとら風に　たちもまかはぬ夕かすみ哉
おきつ風ふきにけらしな行舟の　かすみをいつる春のうなはら
うらとをくたつやかすミもしほやく　けふりをたゝぬ色にみえつゝ

春雪

春来てはつもりもやらて松の葉に　つゆのミむすふあは雪そふる
春も猶ふりそふ雪のはつ花や　ひとへにハあらぬ色にみゆらん
●山たかみ残るかたへにふる雪の　つもるかきりや春にみすらんゆ敷　式部卿宮

竹鶯

●夜な／＼のねくらなからも鶯の　なみたハ竹にあとものこらす　御製
竹の葉の霜ゆきさむミうくひすの　なくやなみたも先こほるらん
●呉竹の夜床もおなしうくひすや　ねてのあさけの窓ちかくなく　式部卿宮

野若菜

今朝ハまた雪間もみえぬ野へに出て　もゆるわかなもつみそわつらふ
子日せし野原のわかなけふはまた　つむ程もなき二葉なりけり
つむ人の袖にちり来る雪よりも　たまらぬ野へのはつわかかな哉

〇H一四六一

侍従大納言點　明應四年十月八日

□春

うすこほりけふとけそめて池水に　むかへは春の色そうかへる
いつみるもかすむ色なるとを山ハ　めつらしけもなき春や立らん
雪うすき野山の木のめ今朝ハまた　かすみにこもる春やきぬらむ

海邊霞

●もしほやく煙はあれとら風に　□□もまかはぬ夕かすみ哉　御製
□□風吹にけらしなゆく舟の　かすみを出る春のうなはら
経信卿の秀哥、をき所もかハらてハ無念歟、又おきつ風と候て、むすひ句のうなはらも、
本哥のしら波にハ立をくれてきこえ候哉

春雪

●春ふるはつもりもやらて松の葉に　つゆのみむすふ庭のあは雪そふる敷　御製
春もなをふりそふ雪のはつ花や　□□とへにはあらぬ色にみゆらん
□□かミのこるかうへにふる雪の　□□るかきりや春に見すらむ　邦高

竹鶯

●夜な／＼のねくらなからも鶯にうくひすの　なみたは竹に跡ものこらす　御製
竹の葉の霜雪さむみうくひすの　なくや涙もなをこほるらむ
くれ竹の夜床もおなし鶯や　ねてのあさけの窓ちかくなく

野若菜

□□はまた雪まもみえぬ野へに出て　もゆるわかなもつみそわつらふ
子日せし野原のわかなけふはまた　つむほともなき二葉なりけり
摘人の袖にちりくる雪よりも　たまらぬ野へのはつ若菜哉

梅風

よそよりも又ふきこかしはるかせの このひともとをさそふ梅か香
梅のはなく木をわかすさそひきて かせのあはするにほひなるらん

●にほひをはをのか物とやさく梅の あたりはなれす春かせのふく 式部卿宮

柳露

糸すゝきなひくすかたの春も又 みとりのやなき露にみたれて
さま／＼にあかすそみつる青柳の 露のミたれも風のすかたも
をく露ハかさしの玉かさを姫の おも影みせてなひくあをやき

春雨

野をとをミふかきかすみを分ゆけは おほえすぬるゝころも春雨
ふるとなき春の雨をも草の庵の しつかなるにや音を聞らん
玉水のをとにきゝてもしられぬや かすみの軒のはるさめの空

春月

●春ことのかすめる影にならはずは 月にむかひて老やかこたむ 御製
くるゝよりかすみへたてゝ山鳥の 尾上はるかにいつる月かな

●かすむなり月のかつらの木のめまて はるとやそらにうちけふるらん 式部卿宮

歸鴈

●かす／＼に秋みしかりのひとつらも おりしちあれ かすみてかへる春のあはれさ 御製
雪のこるこしのしらねにゆく鷹の かすまぬ道も猶まよふらむ

●なれゆくをうきになしてや天津鷹 かすみのころもきてはとまらぬ 式部卿宮

禁中花

●若木よりみなれしはなはさかりにて わか身ふりゆく雲のうへかな 御製
●立まよふ色にはあらて雲の上や はなの所をわきてみすらむ 勝仁
くもりなきはなのひかりハ宮つこの はらはぬ庭のあさきよめかな

山花

分いるや中／＼まよふよし野やま はなよりほかの道しなけれは

梅風

□□^(よ)よりも又ふきこかし春風の □^(こ)のひともとをさそふ梅か香 御製
□^(梅)の花いく木をわかすさそひ来て かせのあはするにほひなるらん

●にほひをハをのか物とやさくむめの あたりはなれす春風のふく

柳露

いとすゝきなひくすかたの春も又 みとりの柳つゆにみたれて
さま／＼にあかすそみつる青柳の 露のみたれも風のすかたも
□^(き)く露はかさしの玉かさをひめの □^(面影)みせてなひくあをやき

春雨

墅をとをミふかきかすみを分ゆけは おほえすぬるゝころも春雨
衣春雨ハ貫之かふることにて候へとも、終の句にいひとち候ては、おもハしからすやと
存候

春月

●ふるとなき春の雨をも草の庵の しつかなるにや音をきく覽 親王御方
たま水の音にきゝてもしられぬや かすみの軒のはるさめの空
□^(春)ことのかすめる影にならはずは 月にむかひて老やかこたむ 御製
くるゝよりかすみへたてゝ山鳥の 尾上はるかに出る月かな

●かすむなり月のかつらの木のめまて 春とやそらにうちけふるらん

歸鴈

●かす／＼に秋みし鷹のひとつらも かすみてかへる春のあはれさ
□^(雪)のこるこしのしらねにゆく鷹の かすまぬ道も猶まよふらん
なれゆくをうきになしてや天つ鷹 霞のころもさてはとまらぬ

禁中花

●若木より見なれし花はさかりにて わか身ふりゆく雲のうへかな 御製
●立まかふ色にはあらて雲の上や はなの所をわきてみすらむ 親王御方
●くもりなき花のひかりは宮つこの はらはぬ庭のあさきよめ哉 邦高

山花

分いるや中／＼まよふよし墅山 花より外の道しなけれは

八重一重かさなる花の色よりや やまのかすみもむれ行覽
いくとせの春をかふるのやま桜 さきはしめにし色もかはらて

庭上落花

●松はたゝをとはかりしてちりまよふ はなにはけしき庭の夕かせ 御製
ひとりちるうらみそふかきやま風も かきねのうちの花はしらしを
散つもるはなのしらゆきふき分て 風こそ庭のあとをみせけれ

同類あるよし存候

里歎冬

この春もとはてやさても山しろの めててふさとにゝほふ歎冬
●この里の春ハすくともやましろの とはにもみはやゐての山吹 勝仁
●くれてゆく春をもとめよ二歳やま吹の 八重垣つくるゐてのさと人 式部卿宮

池藤

●風わたるいけのさゝなみにほふなり みきはの藤にをとやかすらん
●春は又藤なみかけてをのつから いけのこゝろも花によすらむ 勝仁
うつりゆく色ハいつれそ池水の 松のみとりに藤のむらさき
卯花似月

山里にさくうのはなのゆふ月夜 かきねの道のひかりとやなる

●空にしらぬ光をみせて夕月夜 おほつかなしや庭のうのはな 勝仁
さきにけり庭の卯花ひさかたの 月のかつらに枝をかハして

卯月郭公

ほとゝきすす五月まちつる夕ぐれに おもひもかけぬはつねなく也
●をのか音にあはれをそへて郭公 春にをくれし花やとふらん 勝仁
ほとゝきすすをのか五月はよのつねそ それよりさきの一聲もかな

雲間郭公

稲妻のひかりにつれてほとゝきす 雲ますきゆく夜半のひと聲
ほとゝきす宮を旅の空なから 雲より外にやとりかさはや
すかたをも友にや忍ふほとゝきす 雲間もみえぬ空になくなり

八重一重かさなる花の色よりや やまのかすみもむれゆくらん
いくとせの春をかふるのやまさくら さきはしめにし色もかはらて

庭上落花

●松はたゝをとはかりしてちりまかふ はなにはけしき庭の夕風 御製
●ひとりちるうらみそふかき山風も かきねのうちの花はしらしを 親王御方
●散つもるはなのしら雪ふきわけて 風こそ庭のあとをみせけれ 邦高

里歎冬

この春もとはてやさても山しろの めててふさとにゝほふ山ふき
●このさとの歎は春はすくともやましのゝ とはにも見はやゐてのやまふき 親王御方
暮てゆく春をもとめよやまふきの 八重垣つくるゐてのさと人
八重より所なくやと存し候、如何

池藤

風わたるいけのさゝ浪にほふなり みきはの藤にをとやかすらん
春は又藤なみかけてをのつから いけのこゝろも花によすらむ
うつりゆく色ハいつれそいけミつの 松のみとりに藤のむらさき
卯花似月

山さとにさくうのはなのゆふ月夜 かきねの道のひかりとやなる

●空にしらぬひかりをみせて夕月夜 おほつかなしや庭のうのはな 親王御方
さきにけり庭の卯花ひさかたの 月のかつらに枝をかはして

卯月郭公

ほとゝきす五月まちつる夕ぐれに おもひもかけぬ初音なくなり 御製
●をのか音にあはれをそへて郭公 春にをくれし花やとふらん 親王御方
時鳥をのか五月はよのつねそ それよりさきの一聲もかな

雲間郭公

いなつまのひかりにつれてほとゝきす 雲ますきゆく夜半のひと聲
ほとゝきす都をたひの空ならば 雲よりほかにやとりかさはや
すかたをも友にやしのふほとゝきす 雲間もみえぬ空になくなり

河五月雨

さみたれの雲そこりしくむしろ田の 　いつぬき河やみかさそふらん
ふりつミし雪けにまさる水よりも 　やま河ふりしさみたれの比

●山河や水のもくつもなかれ出て 　岩もときよし五月雨の比 　式部卿宮

墅夏草

●いつよりか道ならはれむこの比の 　都は墅へとしけき夏草 　御製
鹿のねをきかぬハかりそつゆふかき 　墅ハなつ草のはなもましりて

ひもとかむ花の秋まつ墅への草に 　露はいまよりむすひをく覽

沼螢

●ありとたにまたしらぬまの蘆の葉に 　くるゝひかりをまつほたるかな 　御製
心ありてとふやほたるもぬま水の 　にこりにしまぬ光みすらん
みかくれに飛やほたるもくるゝ夜は 　かすしらぬまにもえてミゆらん

夏暁月

夏もなを月夜やはやくあけぬらん 　なかむるうちに横雲そひく

●夏ハたゝミぬ夢のまに明る夜の 　月をおとろく鐘のをとかな 　勝仁

またよゐとむかへは月の有明に 　うつるもはやき夏の空かな

夕立

●椎の葉にあらぬ木かけもゆう立ハ 　あらましかりし風のをとかな 　御製
このさとにふるかうちにもゆふたちハ 　よそのはれまをみする空哉

ふりかゝる音ハあられの玉かしハ 　たまらすちるか夕たちの雨

水邊納涼

立よりてむすひそくらす夏やまの 　みとりにすめる水のすゝしさ

●夕日影そこまでミゆるやま河の 　あさ瀬すゝしき水の色かな 　勝仁

●しつかなる岩根の床にゆふすゝミ 　こぬ秋かたる水の聲かな 　式部卿宮

杜蟬

せみのなく森の下みちつゆけくは 　しくるゝ空に猶やまかへむ
秋ちかき森の木のはの下そめに 　時雨をいそく蟬のこゑかな

河五月雨

●さみたれの雲そこりしくむしろ田の 　いつぬき河やみかさそふらん 　御製
ふりつミし雪消にまさる水よりも 　山河ふかしさみたれのころ

●やま川や水のもくつもなかれいてゝ 　岩もときよし五月雨の比 　邦高

野夏草

●いつよりか道あらはれむこのころの 　都は野邊としけき夏草 　御製
鹿のねをきかぬハかりそ露ふかき 　墅は夏草のはなもましりて

ひもとかむ花の秋まつ野への草に 　つゆはいまよりむすひをく覽

沼螢

ありとたにまたしらぬまのあしの葉に 　くるゝ光をまつほたるかな
心ありてとふやほたるもぬま水の 　にこりにしまぬ光みすらむ
水かくれにとふやほたるもくるゝ夜ハ 　かすしらぬまにもえて見ゆらん

夏暁月

夏もなを月夜やはやくあけぬらむ 　なかむるうちによこ雲そひく

●横雲のひき所ハ、猶あらまほしく存候

●夏はたゝミぬ夢の間に明る夜の 　月におとろく鐘の音かな 　親王御方

またよゐとむかへハ月のあり明に 　うつるもはやき夏の空哉

夕立

●椎の葉にふりくる山のゆふたちは 　あらましかりし風のをとかな 　御製
この里にふるかうちにもゆふたちは 　よその晴間をみする空かな 　親王御方

ふりかゝるをとあられの玉かしは 　たまらすちるかゆふたちの雨

水邊納涼

●立よりてむすひそくらす夏山の 　みとりにすめる水のすゝしさ 　御製

●夕日影そこまでミゆるやま川の 　あさ瀬すゝしき水の色かな 　親王御方

●しつかなる岩ねの床にゆふすゝみ 　こぬ秋かたる水のこゑかな 　邦高

杜蟬

蟬のなく杜のしたみち露けくは 　しくるゝ空に猶やまかへむ
秋ちかき森の木のはの下染に 　しくれをいそく蟬のこゑかな

秋ちかき日影もいまは蟬の羽の うすきを色のころも手の森

初秋朝

風もまた吹あへぬ庭のあさほらけ 秋のひかりをみするつゆかな

●今朝はまたきりの一葉もつれなくて 露ふきちらす庭のあき風 勝仁

かせの音の身にしみそむる朝より 露をかなしむ秋は来にけり

七夕

●あまの河帯になるまでちかひてや 秋をとをくもめぐりあふらむ 御製

淵は瀬にかはる世やなきあまの河 たなハたつめのふかきちきりハ

一とせを待ことにしてあまの河 たゞこよひこそ逢瀬しらなミ

野萩露

●秋の野のつゆけしとても真萩原 袖をは花にすらて過めや 御製

こと草の花にやとすなあきの野の 露は真萩のうへにこそみめ

●まはき原はなの下葉の色までも うつろふ露のあかぬ野へかな 式部卿宮

庭萩風

音すこき軒端のおきをきかせハや よそにも秋のかせはふくとも

●庭の露もはらふ音してとふ人の かことかましき萩のうは風 勝仁

●うき秋もたゞやとからかひとりゐて 夕になれはおきのうはかせ 式部卿宮

夜鹿

さ夜なかと妻こふ鹿のしのひ音も なをきゞすてぬをちの里人

秋をうらみ妻をしたひてなく鹿の よるの思ひそよそにかなしき

●ふしわひて小鹿なくなりのかつま あはていく夜かゐなのさゞはら 式部卿宮

夕虫

草村にゆふへまちえてをく露の ひるまたえつる虫そ音をなく

●夏虫のひかりにハあらてきり／＼す 夕かけいそく聲そほのめく 勝仁

●なく虫のたのむいのちもあはれなり 野への草葉にかゝる夕露 式部卿宮

霧中初鴈

秋ちかき日影も今は蟬の羽の うすきを色のころもての杜

初秋朝

風もまた吹あへぬ庭のあさほらけ あきのひかりをみする露哉

●今朝はまた桐の一葉もつれなくて 露ふきちらす庭のあき風 親王御方

風の音の身にしみそむるあしたより つゆをかなしむ秋は来にけり

七夕

●あまの河帯になるまでちかひてや いく秋をとをくもめぐりあふらむ 御製

●淵は瀬にかはる世やなきあまの河 たなハたつめのふかきちきりハ

一とせをまつことにして天の河 たゞこよひこそあふせしらなみ

あふせしら浪、いひおほせられてもきこえず候歟

野萩露

●秋の野のつゆけしとても真萩原 袖をは花にすらてすきめや 御製

こと草の花にやとすな秋の野の 露は真萩のうへにこそ見め

●真萩原はなの下葉の色までも うつろふ露のあかぬ野へかな

庭萩風

●音たつる軒端のおきをきかせハや よそにも秋のかせハふくとも 御製

●初五字、猶心あるやうに御思案あるへく候哉

●庭の露もはらふ音してとふ人の かことかましき萩のうは風 親王御方

うき秋もたゞやとからかひとりゐて ゆふへになれハ萩のうは風

夜鹿

●さ夜なかと妻こふ鹿のしのひ音も なをきゞすてぬをちのさと人 御製

●秋をうらみ露をしたひてなく鹿の よるの思ひそよそにうれしき 親王御方

●ふしわひて小鹿なくなりのかつま あはていく夜かゐなのさゞはら 邦高

夕虫

草むらにゆふへまちえてをく露の ひるまたえつる虫そ音をなく

●夏虫のひかりにハあらてきり／＼す ゆふかけいそく聲そほのめく 親王御方

●なく虫のたのむいのちもあはれなり 野への草葉にかゝる夕露 邦高

霧中初鴈

●めつらしと待^るみん空のあき霧に なにかかきけつかりの玉章 御製
天津鷹きりのまかきの山こえて やとりもとむる夕ぐれの声
みるまゝに霧やへたつるやまこえて 来るはつかりのつらそわかれぬ

山月

●深行はほそたに河のそこまでも 月にそみゆるきひの中山 御製
さやけさは雪にかはらて秋のつき 山はかゝみの影をみすらむ
●出るより雪もかゝらすまささちる 峯のあらしにすめる月かけ 式部卿宮

浦月

志賀のうらや山ハ鏡の名のミして さゝなミとをくみかく月かな
●程もなきうらの箱屋にもる月の ひかりもかはるなミのうへかな^{の影} 勝仁
なミのうへハ氷をしきてすむ月や 真砂の雪を秋にみすらむ

水郷月

宇治河やをともふけゆく水くるま めくれる月の影はすさまし
名にしおハ秋のかつらの里人や 月のミやこにすむ心ちせむ
深にけり松ふくかせも川音も おほゐのさとのあきの月影

聞擣衣

山かつのよるのころもやわきて猶 この夕ぐれにうちしきるらん
●衣うつをちかた人の夜寒まで わか手枕にわひつゝそぬる 勝仁
●よそにきく音さへさむきあさ衣 かさねぬたれか夜半にうつらん 式部卿宮

栽菊

●雲の上や庭のまさこにうつしうへて 菊に千とせの教やとらまし 御製
をのつから菊をもうへてつくりなす 庭のやまの秋ふかき色
やま人のすみ家もこゝとみるはかり うつしうへをく庭のしら菊

秋霜

●露とをき霜とむすひて小篠原 ひと夜に秋そふけゆく 御製
●月いりて霜にふけゆく秋の夜は かねのひゝきそひとりさやけき 勝仁
しほれゆく墅への千種の花の色を 秋に二たひみする霜かな

松間紅葉

●めつらしと待^るみん空の秋きりに なにかかきけつ馬のたまつき 御製
●あまつかり霧のまかきの山こえて やとりもとむる夕ぐれの声 親王御方
見るまゝに霧やへたつる山こえて 来るはつ雁のつらそわかれぬ

山月

ふけゆけハほそ谷河の底までも 月にそ見ゆるきひのなかな
さやけさは雪にかはらてあきの月 山はかゝみの影をみすらむ
●いつるより雲もかゝらすまささちる ミねのあらしにすめる月影 邦高

浦月

志賀のうらや山ハかゝみの名のミして さゝなミとをくみかく月かな
程もなき浦のとまやにもる月の ひかりもかはる波のうへかな
波のうへはこほりをしきてすむ月や 真砂の雪を秋に見すらむ

水郷月

宇治川やをともふけゆく水車 めくれる月の影ハすさまし
●名にしお^は秋のかつらのさと人や 月の都にすむ心ちせむ 親王御方
深にけり松ふく風も川音も 大井のさとの秋の月かけ

聞擣衣

山かつのよるのころもやわきてなを この夕ぐれにうちしきるらん
●ころもうつをちのかた人の夜寒まで わか手枕にわひつゝそぬる 親王御方
●よそに聞をとさへさむきあさころも かさねすたれか夜半にうつらん 邦高

栽菊

●雲のうへや庭のまさこにうつし植て 菊に千とせのかすやとらまし
をのつから菊をもうへてつくりなす 庭の山路の秋ふかき色
やま人のすみ家もこゝとみるはかり うつしうへをく庭のしら菊

秋霜

露とをき霜とむすひてをさゝ原 ひと夜に秋そふけゆく
●月いりて霜にふけゆく秋の夜は かねのひゝきそひとりさやけき
しほれゆく墅への千種の花の色を 秋に二たひみする霜かな

松間紅葉

●青かりし梢はおなしやままつの ひま／＼見するはつ紅葉かな 御製
●松にそふ紅葉の色やあきふかき 霜の後まてのこしてもミむ 勝仁

暮秋

昨日けふなかめわひぬるゆふへかな 秋のわかれを空にかこちて
けふのみとおもはぬ秋の夕さへ たゝおほかたになかめやハせし
したふこそけによのつねよそれそとて 立かへるへき秋ならねとも

寢覺時雨

●ともにふる涙よいかに老らくの ねさめ夜ふかく時雨ゆく空 御製
●過ぎやすき時雨もおなし夢の間に 寢覺おとろく袖そつゆけき 勝仁
明やらぬ霜夜の床のむら時雨 いくねさめをかおとろかすらん

谷落葉

●朽はつる色をそめてややまかせの もみち吹かくる谷のむもれ木 御製
●たにふかミ風の木のはのゆく末を 又ことかたにさそふ水かな 勝仁
秋の色やたにかけふかく残るらむ 峯の木のはのちりうせすして

枯野

霜にくち風にはつれてふゆの墅の をはなな袖そなをせはくなる
●みし秋の墅ハ冬かれの後までも 尾花や霜の色にのこらん 勝仁
草ハミな跡なき墅へのをさゝハラ かれせぬ色も霜にさむけし

冬月

●袖のうへに霜こほりともふゆの夜を なかめすつへき月の影かな 御製
●手にむすふ水にはあらて影やとる 袖のこほりのさむき月かな 勝仁
●おほろ夜をみしかき空にかこちきて 秋とはいへと霜雪の月 式部卿宮

豊明節會

●わすれめや豊のあかりの月影に いまハめなれぬをミの衣手 御製
山藍の袖ハ霜夜の月までも とよのあかりのひかりとそなる
乙女子かたちまふ袖も月かけも あらはれいつる雲のかよひ路

湖千鳥

●あをかりし梢はおなし山まつの ひま／＼見するはつ紅葉かな 御製
●松にそふ紅葉の色やあきふかき 霜の後まてのこしてもミむ

暮秋

●そめやらぬ色かあらぬかまつか枝の みとりにまじる山の紅葉ゝ 邦高
昨日けふなかめわひぬるゆふへかな 秋のわかれを空にかこちて
けふのみとおもはぬ秋の夕さへ たゝおほかたになかめやハせし
したふこそけによのつねよそれそとて たちかへるへき秋ならねとも 邦高

寢覺時雨

●ともにふるなみたよいかに老らくの 寢覺夜ふかくしくれゆく空 御製
●すぎやすき時雨もおなし夢のまに ね覺おとろく袖そ露けき

〔コノ間（一紙分？） 闕脱敷〕

豊明節會

●わすれめや豊のあかりの月かけに いまハめなれぬをミのころもて 御製
●山あひの袖は霜夜の月までも とよのあかりの光なるらむ 親王御方
おとめこかたちまふ袖も月かけも あらはれいつる雲のかよひち

湖千鳥

さゆる夜の友なし千とりをちこちに 聲ふきみたすよこのうら風
しほならぬ海ふくかせになきたちて 浪にくもるや千とりなるらん
見るめなき妻をはなにとさ夜千鳥 ことゝひわたるしかのうらなミ

田氷

守すてし田のものの水のうすこほり 鳥ふミしたく音のさむけさ

●冬の田のこほりのひまのたえ／＼に もる聲のこす水そさひしき 勝仁

●小山田の水のいなくきそのまゝに こほりも霜もとちかさねつゝ 式部卿宮

雪散風

をのつから窓のひかりかくれたけの 雪吹いるゝ冬のさ夜かせ

●はるゝまもをのかえたよりちる雪や 風のやとりの松をみすらむ 勝仁

●空はいまはれてもふるや山風の 木すゑにつもる雪はらふ覽 式部卿宮

雪朝

●明るより雪のふかりハ四方にみちて 高ねの雲に日こそをそけれ 御製

ふり出てつもるもうすき今朝ハまつ 雪間みせたる冬のやとかな

ふりつもるあしたの雪の空はれて 山ハかゝみにうつる日のかけ

歳暮

●事しけき世にまきれきて行年を したふこゝろのたれもやハある 御製

●よしさらハとまらぬ年のくれことに 日かすのこりて来るはるもかな 勝仁

いたつらに又年なミハこゆるきの いそかすなから春やむかへん

此躰にいたくかはらぬ哥、ふるくあるやうに存候

寄月恋

●月にもや忍ふとすれとみえつらん 心にゆるす夜のなみたは 御製

今よりハ空ゆく月をちきりてや 恋しき時のおも影にみむ

さても又たかおもかけをさそひきて 月に物おもふ身とはなりけん

寄雲恋

●伊駒山かゝれる雲のたえせぬや わか恋路にもへたてとはなる 御製

●偽とミてもしりてもなくさむや 人のこゝろのはなのしら雲 勝仁

あたにみる人のこゝろのうき雲に かけてかひなき身のちきり哉

さゆる夜のともなし千鳥をち近に 聲ふきみたすよこのうら風
塩ならぬ海ふく風に鳴たちて なミにくもるや千鳥なるらむ

●みるめなきつまをハなにとさ夜千とり こととひわたるしかのうらなミ 邦高

田氷

●守すてし田の面の水のうすこほり とりふミしたくをとのさむけさ 御製

●冬の田のこほりのひまのたえ／＼に もる聲のこす水そさひしき 親王御方

●小山田の水のいなくきそのまゝに こほりも霜もとちかさねつゝ 邦高

雪散風

をのつから窓のひかりかくれ竹の 雪ふきいるゝ冬のさ夜かせ

●晴々間もをのか枝よりちるゆきや かせのやとりの松をみすらむ 親王御方

●空はいま晴てもふるや山風の 木すゑにつもる雪はらふ覽 邦高

雪朝

●あくるより雪のひかりは四方にみちて たかねの雲に日こそをそけれ 御製

ふりいてゝつもるもうすき今朝ハまつ 雪間みせたる冬のやとかな

ふりつもるあしたの雪の空はれて 山はかゝみにうつる日のかけ

歳暮

ことしけき世にまきれきて行年を したふこゝろのたれもやはある

よしさらハとまらぬ年の暮ことに 日数のこりて来る春もかな

いたつらに又とし浪もこゆるきの いそかすなから春やむかへむ

寄月恋

●月にもやししのふとすれと見えさらむ こゝろにゆるす夜のなミたは 御製

いまよりは空ゆく月にちきりてや 恋しき時のおも影にみむ

さても又たかおもかけをさそひきて 月に物思ふ身とはなりけん

寄雲恋

伊駒山かゝれる雲のたえせぬや わか恋路にもへたてとはなる

●偽と見てもしりてもなくさむや 人のこゝろの花のしらくも

あたにみる人のこゝろのうき雲に かけてかひなき身の契かな

寄風恋

たのめぬをしめてこゝろの松のかせ 袖のミしほるくれはかひなし
きかしたゝとはぬ夕のをとつれハ 風も秋なるあはれそひつゝ
たのめても来ぬハならひと思ふ夜を 問につらさの軒の松かせ

寄雨恋

人の袖もぬらすときかは待くれの こゝろにさはる雨はうからし
さはるとて又やこさらんわかやとの 雨にたちよる人ハありとも
●とはれしなわれもまたしとひとかたに 思ひなくさむ雨のをとかな 式部卿宮

寄露恋

●袖のうへにつらぬきかけてしらせハや うきに教そふ露のしらたま 御製
●きえやすき物ともみえず袖のつゆ つれなき色を人やとかめむ 勝仁
せめてたゝあはれといはんことの葉に かゝらんつゆの命ともかな

寄山恋

われにこそ山の名とをくへたつとも 人はいもせの道やしらまし
年へてもおなしこゝろのつれなさや ときはの山の岩木なるらむ
●としつもある思ひのほとをやまとみよ ふもとの塵のかすならずとも 式部卿宮

寄海恋

うしやたゝ人のこゝろのおくの海を くみしる程のかひもなき身ハ
朝夕にミてもたのましわたつ海の しほのみちひにかはる心は
須磨のあまのたたくや思ひのよるハもえ ひるはしほらむ袖をみせはや

寄池恋

●思ひあまりあらぬ名をさへかるの池の いひよることも人傳にして 御製
●影とめてふかきなさけを尋ねミン 月たにやとる池のこゝろに 勝仁
ぬぬなはの寝ぬ夜くるしき思ひのミ ますたの池のいひもいてハや

寄杜恋

年をふるあはての森の夕時雨 色にいてゝもかひもなき身や
たのまれぬ心の色よたかかたに かねてうつろふ森のした露
色にいてしことの葉よりやうき名をも 世にのこしけむかしハ木の杜

寄風恋

たのめぬをしめてこゝろの松の風 袖のミしほるくれハかひなし
きかしたゝとはぬゆふへのをとつれハ 風も秋なるあはれそひつゝ
●たのめてもこぬハならひとおもふ夜に とふにつらさの軒のまつ風 邦高

寄雨恋

●人のそてもぬらすときかハ待暮の こゝろにさはる雨ハうからし 御製
●さはるとて又やこさらんわかやとの 雨にたちよる人ハありとも 親王御方
●とはれしなわれもまたしひと方に 思ひなくさむ雨のをとかな

寄露恋

●袖のうへにつらぬきかけてしらせハや うきにかすそふ露のしらたま 御製
●きえやすき物ともみえず袖のつゆ つれなき色を人やとかめむ 親王御方
●せめてたゝあはれといはむことの葉に かゝらんつゆのいのちともかな 邦高

寄山恋

我にこそ山の名とをくへたつとも 人はいもせの道やしらまし
年へてもおなしこゝろのつれなさや ときハの山の岩木なるらむ
●としつもあるおもひのほとを山と見よ ふもとの塵のかすならずとも 邦高

寄海恋

うしやたゝひとのこゝろのおくの海を くみしるほとのかひもなき身は
朝夕にみてもたのましわたつ海の しほのみちひにかはる心は
すまのあまのたくやおもひの夜るハもえ ひるはしほらむ袖をみせハや

寄池恋

●おもふあまりあらぬ名をさへかるの池の いひよる事も人つてにして 御製
●影とめてふかきなさけをたつねミむ 月たにやとる池のこゝろに 親王御方
ぬぬなはの寝ぬ夜くるしき思ひのみ ますたの池のいひもいてハや

寄杜恋

年をふるあはての杜のゆふしくれ 色にいてゝもかひもなき身や
たのまれぬ心の色よたかかたに かねてうつろふ森の下露
色にいてしことの葉よりやうき名をも 世にのこしけむかしはきの杜

寄河恋

思ひつゝいくとし月をふる川の なかれての世をたのむかひなき
恋せしのためしありともみそき河 いく瀬逢瀬をわれは祈らん

〔コノ間（一紙分？） 闕脱敷〕

影ハかりミつゝはえこそ山のゐの 水のころをくみもしらはや

寄石恋

かきりあれは千ひきの石はよりきても うこかぬ人のうきころ哉
吹あけの真砂をミてもおもひしれ それさへなひくためしあるよを
あひみへきちきりやかたきさゝれ石の 岩ほとなるもかきりある世に

寄火恋

身よいかにつらきころはあくた火の 消かへるともあはれかけしな
ますらをか鹿まつほかけたえゝに 明やすき夜そあふかひもなき
よる／＼はあまのともせるいさり火の うらみにたえぬ身ハこかれつゝ 式部卿宮

寄玉恋

● わか袖ハひとのころにまかせてや なミたの玉もみちひあるへき 御製
● 玉ならば夜るのひかりもみゆへきに まくらのしたも涙ゆるすな 勝仁

寄河恋

おもひつゝいく年月をふる川の なかれての世をたのむかひなき
恋せしのためしありともみそき河 いくせ逢瀬をわれはいのらむ

寄木恋

● とハゝやな恋しなむ身の後の世に わたらむ河も逢せありやと 邦高
引かたをよそにきくよりかすならぬ みをの柚木ハくちねとそ思ふ
かくてのミ年ふる中はうつほ木の もとのねさしもうき契かな
● かはらしのちきりをなにとしゐ柴の しゐても人にたのめをかまし 邦高
寄草恋

寄水恋

おもひ草つゆのなきけもよしやたゝ つゐには色のかはるならひに
● はかなしやなひく程なきわか草の 二葉にちきる心なかさば 親王御方
われも又たねやとゝましわすれ草 人のうきよりおひもはしめハ
やましろのゐての玉水たまさかに くるもやあさき契ならまし
あふさかや関の清水もわれのミは わたれとぬれぬ袖としもなし
影はかり見つゝはえこそ山の井の 水のころをくみもしらハや
寄石恋

寄火恋

かきりあれは千ひきの石ハよりきても うこかぬ人のうきころかな
● 吹あけの真砂をミてもおもひしれ それさへなひくためしある世を 親王御方
● あひみむのちきりそかたきさゝれ石の いはほとなるもかきりある世に 邦高
身よいかにつらきころはあくた火の 消かへるともあはれかけしな
うき中はいやしき身とやあくた火の きえかへりてもあはれかけめや
てにをハ、いかにそや存し候、如何
ますらをか鹿まつほかけたえゝに 明やすき夜そあふかひもなき
よる／＼はあまのともせるいさり火の うらみにたえぬ身ハこかれつゝ

寄玉恋

● わか袖はひとのころにまかせてや なミたの玉もみちひあるへき 御製
● 玉ならば夜るの光もみゆへきに まくらの下も涙ゆるすな 親王御方

よしさらは袖のしらたま光あれな まよふ恋路のしるへともせん

寄衣恋

たのまれぬ人のこゝろのあさころも きてもうらみのたえぬ中かな

●かひなしや我身にならすさ夜ころも うらミはかりを人にかさねて 勝仁

●心たにへたてはてすはこひころも かへさぬよはも夢ハみてまし 式部卿宮

寄絲恋

●とはれねはわひつゝひとりふし絲の よるの思とくたのひに夢たにもなし 御製

●別路のこゝろほそさもかた糸の あはぬにまさる物ハおもはし 勝仁

●一すちにたえなむよりも片いとの あはぬにかゝる名こそおしけれ 式部卿宮

寄鏡恋

かひなしやかゝミの神にちかひても うき面影にかけもはなれば

はかなくもかゝミのかけになくさめて 物おもふ身のたくひとそみる

●たれゆへのつらさとかみりますかゝミ 我身ハかけとうつるすかたを 式部卿宮

寄舟恋

●夕波のさはくなきさのいつてふね いつてに人はさてもよりこむ 御製

●おもふまの風まつふねのつなて繩 心もとけぬほとそくるしき 勝仁

●おきつなミたちゐにさかく袖ハあれと おもふ湊とよる舟もなし 式部卿宮

寄屋恋

忘るやとおもふハかりにあつま屋の まやのあまりにとはぬ君哉

袖ハいつほす間もあらんなには人 あし火たく屋も浪ハかけゝり

とし月をふる屋の軒にふる雨の 身ハくちぬともうき名もらすな

寄門恋

帰るさのよそのなこりにさかくしの 草の戸さしもとはて過けん

わりなくも門よりいらぬ忍かよひ路は よる／＼このせき守もなし

かひなしやたのむちきりも枚の門 さしてつれなきしるしハかりは

寄戸恋

又やミむ明ぬといわかれ路の さきの戸さゝぬ人のおも影

●問れしとおもひとちむる槇の戸に 気色ハかりの月をたにみす 勝仁

よしさらは袖のしら玉ひかりあれな まよふ恋路のしるへともせん

寄衣恋

たのまれぬ人のこゝろのあさころも きてもうらみのたえぬ中かな

●かひなしや我身にならすさ夜さころも うらみハかりを人にかさねて

●心たにへたてはてすはこひ衣 かへさぬ夜半もゆめハ見てまし

寄絲恋

●とはれねはわひつゝひとりふしいとの よるのおもひに夢たにもなし

●わかれ路の心ほそさもかたいとの あはぬにまさる物ハおもはし 親王御方

●一すちにたえなむよりもはもかたいたとの あはぬにかゝる名こそおしけれ 邦高

寄鏡恋

かひなしやかゝミの神にちかひても うきおもかけにかけもはなれば

はかなくもかゝミのかけになくさめて 物おもふ身のたくひとそみる

●たれゆへのつらさとかみりますか鏡 わか身ハかけとうつるすかたを 邦高

寄舟恋

●夕浪のさはくなきさのいつてふね いつてに人ハさてもよりこむ 御製

●おもふまの風待ふねのつなて繩 心もとけぬほとそくるしき 親王御方

●興つなミたちゐにさかく袖ハあれと おもふみなとよるふねもなし 邦高

寄屋恋

●わするやとおもふハかりにあつま屋の まやのあまりにとハぬきミかな 御製

●袖はいつほす間もあらんなには人 あし火たく屋に浪ハかけゝり 親王御方

年月をふるやの軒にふる雨の 身ハくちぬともうき名もらすな

寄門恋

●かへるさのよその名こりにさはらしの 草の戸さしもとはて過けん 御製

わりなくも門よりいらぬしのひ路は よる／＼この関守もなし

かひなしやたのむちきりも枚の門 さしてつれなきしるしハかりは

寄戸恋

●わすれすよ明ぬと出しわかれ路の まきの戸さゝぬ人のおも影 御製

●とはれしとおもひとちむる槇の戸に 気色ハかりの月をたに見す

いたつらに立そやすらふまきの戸の おしてはいらむ契ならねは
寄牆恋

わりなしやかねてさためぬ中かきを こえてもこよとなにちきるらむ
いかにせむ恋もなへてのかすならぬ かきねのうちのへたてある身を
いとほるゝ身ハ山かつのかきほとや あはれもかけすへたてはつらん

寄庭恋

あれわたる庭のよもきふ分こしや 露のちきりを先のこすらむ

●あけきあまり庭に出ても待くれの けふもむなしき空やうらみん 勝仁

●わすれえぬ心の道をのこしてや 庭のよもきのつゆハはらひけん 式部卿宮

暁鷄

もゝしきの鷄人をしるへにや よそも八聲につけわたるらん
夜や残るよそハつけつるとりの音も きこえぬやまのあかつきの空
里とをき鳥のやこゑもあかつきの しつかなるにそさたかにハきく

夜燈

●身にはハや十年のいくついたつらに すきしをおもふともし火の下 御製
さ夜ふかミかゝけつくさぬ灯の みしかきかけそ残るほとなき
月をみんなためにもあらていたつらに おしやそむくる闇のともしひ

簷松

●都にも軒はのやまとみるはかり としふる庭の松の木たかさ 御製
●をのつから軒のいた間やかくすらん えたさしおほふ松のおち葉に 勝仁
●うへ置てわれもふりぬる宿なれや 松の木たかさかけをみるにも 式部卿宮

窓竹

吹風の北窓さむき夜半もあらし ふゆかれしらぬ竹しけき陰

いたつらに立そやすらふまきの戸の おしてはいらむ契ならねは
寄牆恋

●わりなしやかねてさためぬ中墻を こえてもこよとなにちきるらむ
婚姻の礼、孟子などの心もこもり候歟、尤其興候哉

いかにせむ恋もなへてのかすならぬ かきねのうちのへたてある身を
いとほるゝ身ハ山かつのかきほとや あはれもかけすへたてはつらん

寄庭恋

あれわたる庭のよもきふわけこしや 露のちきりをなをのこすらむ

なけきあまり庭に出てもまつくれの けふもむなしき空やうらみむ

わすれえぬ心のみちをのこしてや 庭のよもきの露ハラひけむ

初五字わすれぬにて事足候、えぬの詞、あまりてきこえ候、近代此詞よむ人も候へ共、
不好候由、或先達申候し、誠可然候歟

暁鷄

百機の鷄ひとをしるへにや よそも八こゑにつけわたるらん
夜や残るよそハつけつるとりの音も きこえぬ山のあかつきの空
初五文字、いますこしみしかきやうにきこえ候歟

夜燈

●身にはハや^{十年のいくつ}いたつらに すきしをおもふともし火のもと 御製
とをとせとはいたく申ならハし候ぬにやと存候
さ夜ふかミかゝけつくさぬともし火の みしかき影そ残るほとなき
月をミむためにもあらていたつらに おしやそむくる闇のともし火

簷松

●みやこにも軒端のやまとみるはかり 年ふる庭の松の木たかさ 御製
●をのつから軒のいたまやかくすらん えたさしおほふ松の落葉に
●うへをきてわれもふりぬるやとなれや 松の木たかさ陰をみるにも 邦高

窓竹

ふく風のきた窓さむき夜半もあらし 冬かれしらぬ竹しけきかけ

雪のうちすゝしき陰をおもふにも 夏冬あかぬまとのくれたけ
おりふしの色をはわかつてよとゝもに 落葉そたえぬ窓のくれ竹 式部卿宮
嶺雲

●あさな夕なよそにもふかきしら雲の わきてめにたつかつらきの峯 御製

●峯たかみ色こき雲のひとつらに 入日はみえてかけはのこらす 勝仁

●見るかうちにうつりかはれる面影や 風をすかたの嶺のしら雲 〔式部卿宮〕

●瀧水

●岩根のミたゝ苔むして名にしほふ つゝみの瀧は聲もたえせず 御製

●おちたきつなかれそたえぬおく山の 木とのしつくをミなかミにして 勝仁

●河上はあまたにみえて行水の すゑの一瀬やたきと落らん

●杣木

●心してやま路のそま木ひきくたせ ひかふる人の跡にあらすは

●たれもこのためしにならへ杣木とる 山にもふかき道もとむなり

●すなをなるためしをひきておさまれる 御代にやいつミの杣木とをミ歟なるらむ 式部卿宮

●潤草

●かる人の道なき谷のかけ草や 心のまゝに生しけるらむ

●うつりゆく日影はみえすつゆ霜の ひるまもしらぬ谷のした草

●来る春もよそなるたにのかけ草は 冬とてかるゝ色やなからむ

●磯浪

●すまはまた岩ほの中もいかならむ 磯うつなミのをとさはくくなり

●心あるあまのすさみやひと草の ぬしまか磯のなミのあけほの

●あさりして磯たちぬらすあま人の 袖になミこす浦かせそふく

●山家嵐

●かりにたにいてしとおもふ柴の戸を ミねのあらしのなにとゝく覽

●吹あらしうき世のほかのはな紅葉 とまらぬ色そ友とみるへき

●柴の戸のしはしか程やあはれとも うしとおもふあらしなるらん

●山家杣

●雪のうち涼しき陰をおもふにも 夏冬あかぬ窓のくれ竹 親王御方
おりふしの色をはわかつてよとゝもに 落葉そたえぬまとの呉竹
嶺雲

●あさな夕なよそにもふかきしら雲の わきてめにたつかつらきのみね

●峯たかみ色こき雲のひとつらに 入日はみえて影はのこらす 親王御方

●みるかうちにうつりかはれるおもかけや 風をすかたのみねのしら雲 邦高

●瀧水

●岩根のミたゝ苔むして名にしおふ つゝみの瀧はこゑもたえせず

●おちたきつなかれそたえぬおく山の 木とのしつくをミなかミにして 親王御方

●川上はあまたにみえてゆく水の すゑの一瀬やたきとおつらむ

●杣木

●こゝろして山路のそま木ひきくたせ ひかふる人のあとにあらすハ 御製

●たれもこのためしにならへ杣木とる 山にもふかき道もとむなり

●すなをなるためしをひきておさまれる 御代にやいつミのそまきなるらん

●潤草

●かる人の道なき谷のかけ草や 心のまゝに生しけるらむ

●うつりゆく日影はみえすつゆ霜の ひるまもしらぬたにのした草

●来る春もよそなるたにのかけ草ハ 冬とてかるゝ色やなからむ

●磯浪

●すまハまた岩ほの中もいかならむ 磯うつなミのをとさハくくなり 御製

●心あるあまのすさみやひと筆の ぬしまか磯の浪のあけほの

●あさりして磯たちぬらす海士人の 袖になミこす浦かせそふく 邦高

●山家嵐

●かりにたに出しとおもふしはの戸を ミねのあらしのなにとゝく覽

●ふけあらしうき世のほかのはな紅葉 とまらぬ色そ友とみるへき

●此初五文字、この比つねにきこえ候歟、不庶幾候様存候

●柴の戸のしはしかほとやあはれとも うしとおもふあらしなるらん

●山家杣

山ふかミ杖たつかとをひととは、なをいかさまのすみかもとめん
陰くらきすきを軒端の山里や うつる月日もしらてすむらん

●山ふかミすきたつかとはとふ人の なきことよりそしるしなりける 式部卿宮

山家苔

●衣こそかくもやつさめ岩のかき 松のはしらも苔むしにけり 御製

●苔のむすためしをしりてさゝれ石の いはほかなかにたか世へぬらん 勝仁

山かけの苔のむしろにたれをかも しる人にしてしき忍ふへき

山家夢

さめやらぬうき心とややまふかく すむもうき世の夢にミゆらん

●しつかなるみ山の窓のふかき夜も 心にさます夢そみしかき 勝仁

夢や先おもふ宮ことかよふらむ 身ハやまふかくかけはなれても

山家煙

朝夕のけふりこそあれ山さとは おち葉つま木をたかぬ日もなし

一とをりよこさる雲や山さとに 風の吹しくけふりなるらむ

うき世いてし山にても又なにを身の 思ひま柴のけふりたつらん

羈中山

行くれぬいさやまひにことゝはむ やとりはこゝにありとこたへよ

かへりみる都の空になくさみて 猶やま(御製)「ふした」かくのほる道かな

●身ひとつそやとりさためぬ旅の空 雲の夕ある山をみるにも 式部卿宮

羈中墅

●あつま路や過し野ことを武蔵墅に くらへても猶とをくこそおもへ 御製

いづくにかやとりハからむたかしまや けふもかち墅の道のくるしき

●あはれなり夢の枕ををゆふ露の やとりたつぬる墅もへの旅人 式部卿宮

羈中関

旅ころもきのふやけふと思ひしに としもこえゆくしら川のせき

●しるよりもしらぬ人にやあふさかの せき路こゆれば都へたてゝ 勝仁

●鳥の音にいそくはつらし関の戸の たれにおもはむ名残ならねと 式部卿宮

羈中浦

山ふかみ杖たつ門を人とは、なをいかさまのすみかもとめむ

陰くらき杖を軒端のやまさとや うつる月日もしらてそむらん

山ふかミすきたつかとはとふ人の なきことハりそしるしなりける

山家苔

●ころもこそかくもやつさめ岩のかき 松のはしらもこけむしにけり 御製

●苔のむすためしをしりてさゝれ石の 岩ほかなかにたか世へぬらん

山かけのこけのむしろに誰をかも しる人にしてしきしのふへき

山家夢

さめやらぬうきこゝろとや山ふかく すむもうき世の夢にミゆらん

●しつかなるみ山の窓のふかき夜も 心にさむる夢ますそみしかき 親王御方

夢やなをおもふ宮ことかよふらむ 身はやまふかくかけはなれても

山家煙

あさゆふのけふりこそあれ山さとは おち葉つま木をたかぬ日もなし

●一とをりよこさる雲や山さとに 風の吹しく煙なるらむ 親王御方

うき世いてし山にても又なにを身の おもひま柴のけふりたつらん

羈中山

●行くれぬいさ山ひにことゝはむ やとりはこゝにありとこたへよ 御製

●かへりみる都の空になくさみて 猶やまたかくのほる道かな 親王御方

●身ひとつそやとりさためぬたひの空 雲のもゆふある山をみるにも 邦高

羈中野

●あつま路や過し墅ことをむさし墅に くらへてもなをとをくこそおもへ 御製

いづくにかやとりハからむたかしまや けふもかち墅の道のくるしき

●あはれなり草のまくらをゆふ露の やとりたつぬる墅へのたひ人

羈中関

たひころもきのふやけふと思ひしに 年もこえゆくしら川の関

●しるよりもしらぬ人にや相坂の 関路こゆれば宮こへたてゝ 親王御方

●鳥の音にいそくはつらしせきの戸の たれにおもはむ名残ならねと 邦高

羈中浦

● 明やらぬかたみのうらに舟とめて 月にいもおもふふるさとの空 御製
故郷のたよりもあらはなミ風に うらつたひゆく道をつけハヤ

● 帰るなみに袖うちぬらしたひころも うらかなしくもこきやわかれん 式部卿宮

羈中泊

● ことうらにうきねをせし月清き 今夜あかしのとまりさためて 御製

しほれゆくなみなれころもかへしても よるのとまりに夢をやハミン

なミ枕みる夢もなしいく夜さて なれしもしらぬ床のうらかせ

祝

● 名に高き三のくにゝも日のもとや 神にうけつゝ代とそたゝしき 御製

松の千とせ竹の千尋の陰にたに ひさしき世とハかきりあらめや

● 君にいまなひくすかたやよろつ國 もの殿 たミを草葉の風にみすらん 式部卿宮

伊勢

● にこりゆく世をおもふにもいすゝ河 すまはと神をなをたのむ哉 御製

ミかきなす玉かきよりもこの神の かやか軒端やわきてみゆらん

● 舌のためときくもかしこし宮はしら けつらすきえぬかやか軒端ハ 式部卿宮

石清水

● 石清水いけるをはなつちかひこそ ほとけの道にかはらさりけれ 御製

名に高き神のひかりもいはしミつ 取中のあきの月にミゆらむ

男山いけるをはなつちかひまで 名たかき月の秋の川ミつ

賀茂

● 賀茂河やなみにうかみし矢のことく 道すくなれといのるとをしれ 御製

こゝのへの雲のうへにそあらはれむ わけいるつちの神のしるしは

九重のちかきまもりとあとたれて すむもいく代そ賀茂の河水

春日

● 春日山神のつけをもあふくより 手向そしけきやまことのは 有注 御製

すかの根にまつあらはれぬ春日山 松にちとせのなかきためしは

● あげやらぬかたみのうらに舟とめて 月にそしたふふるさとのそら 御製

故郷のたよりもあらはなミ風に うらつたひゆく道をつけはや

● かへる浪に袖うちぬらし旅ころも うらかなしくもこきやわかれん 邦高

羈中泊

● こと浦にうきねをハせし月清き 今夜あかしのとまりさためむ て殿 御製

しほれゆく波なれころもかへしても よるのとまりに夢をやハみむ

浪まくらみる夢もなしいく夜さて なれしもしらぬ床のうら風

祝

● 名にたかき三のくにゝも日本や 神にうけつく代とそたゝしき 御製

● 松の千とせ竹の千尋の陰にたに ひさしき舌とハかきりあらめや 親王御方

君にいまなひくすかたやよろつ國 たミを草葉の風にみゆらん す殿

伊勢

● にこりゆく世をおもふにもいすゝ川 すまはと神をなをたのむ哉 御製

みかきなす玉かきよりもこの神の かやか軒端やわきてみゆらん

世のためときくもかしこし宮はしら けつらすきえぬ萱か軒端は

宮柱はかりにて、神祇にきこえ候ハ、可然候、此一首、猶唐堯の宮室を詠し候に相似

候哉と存し候、如何

石清水

いはし水いけるをはなつちかひこそ 佛の道にかはらさりけれ

名にたかき神のひかりも石清水 最中の秋の月にミゆらし

男山いけるをはなつちかひまで 名たかき月の秋の川水

賀茂

● 賀茂川やなみにうかみし矢のことく 道すくなれといのるとをしれ 御製

九重の雲のうへにてあらはれむ わけいかつちの神のしるしは

こゝのへのちかきまもりと跡たれて すむもいく代そ賀茂の川水

春日

● かすか山神のつけをもあふくより たむけそしけきやまことのは 有注 御製

すかのねにまつあらはれぬ春日山 松に千とせのなかきためしを

天か下おほふめくみやみかさやま 墅なる草木の露にミゆらん

日吉

●嶺とをきみやこの空八月よし 日よしもわきててらささらめや 御製

法の門もまもらむ道と大比叡や こゝにも三輪の神はこの神

●からさきの松こそしるしことよむ 御舟をよせし神のむかしも 式部卿宮

僻點百二十首

参議藤原基綱上

御製 四十五首

式部卿宮 卅八首

勝仁 卅七首

●天か下おほふめくみのみかさ山 墅なる草木の露にミゆらん 邦高

日吉

●嶺とをきみやこの空八月よし 日よしもわきててらささらめや 御製

●法の門もまもらむ道と大ひえや こゝにも三輪の神ハこの神 親王御方

●からさきの松こそしるしことよむ 御舟をよせし神のむかしも 邦高

僻案愚點百廿一首

ひろひとつるあまのすさみやいかみむ 難波のミつの玉の数く 実隆上

御製 四十九首

式部卿宮 卅首

勝仁 卅二首

【略解題】

本稿で翻刻した『禁裏御点取和歌』は、後土御門天皇・勝仁親王（後の後柏原天皇）・邦高親王の三名の百首を歌題ごとに二本書写して姉小路基綱・三条西実隆に合点させた資料である。『国立歴史民俗博物館資料目録「八一」』高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」（国立歴史民俗博物館、二〇〇九）の記載を参考にしつつ以下に書誌を掲げる。

卷子装二軸。表紙は卅入子菱靈芝文金欄（後補）で、見返しは金地金砂子・霞。法量①〔H一四六一〕三〇・五糶×一四七九・〇糶。②〔H一四六一〕三一・五×一五二・〇糶。端作り題①「姉小路宰相点明応三年十月日」、②「侍従大納言点明応四年十月八日」。本文別筆で後人の筆によると思われる。①②は同筆か。改装時に首部が切断され、表裏逆につなげられたものとされる（前掲『高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」』）。和歌一首二行書。題一字下がり。墨合点あり。裏打補修が施される。紙数①三四紙。②三三紙。①は後柏原天皇宸翰、姉小路基綱批点。②は伏見宮邦高親王御筆、三条西実隆批点。桐の箱に収納され、箱書「点取／後柏原院宸翰／伏見邦高親王染筆」。附属文書二点有。（一）小札（一五・〇糶×二・九糶）「点取和哥（一巻後柏原院宸翰／一巻邦高親王筆）」。（二）添書（二七・六糶×一七・一糶）「姉小路参議基綱卿点／御製後柏原帝宸翰／伏見邦高親王（式部卿）親王／勝仁親王／侍従大納言実隆卿点／同上御人数／邦高親王御筆」。以上は包紙にあり、ウハ書「点取（後柏原帝宸翰／伏見邦高親王染筆）添書」。孤本。後土御門天皇・勝仁親王・邦高親王の現存の家集には他出が見出されない。

②の「く歟」の傍記本文は、①の本文に全て一致する。この現象は、②に実隆が批点し、①が批点を反映した形で清書され完成し、その上さらに基綱が批点した、と説明するのが最も自然であるが、端作り題の年紀が、①は「明応三年十月日」、②は「明応四年十月八日」であり、①が先行する。よって、①の本文を踏まえて実隆が批点を加えたと考えざるを得ないが、あるいは、後人が端作題の年紀を記載する際、①②を取り違えてしまった可能性も残ろう。